

# SRID NEWSLETTER

No. 369 AUGUST 2006 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎  
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内  
URL: <http://www.srid.jp>

8月号

二つの国際まちづくり

独立行政法人・都市再生機構岩手都市開発事務所長 小林 一  
EBRD 新マケドニア・カンントリー・ストラテジー体験記  
EBRDスコピエ事務所長 中澤 賢治

## お知らせ

1. 幹事会 9月8日(金) 午後6時30分から 国際協力銀行にて
2. 懇談会  
○日時：9月25日18:30-20:30頃  
○テーマ：『日本・アジア・アフリカ：農村社会開発の評価と展望』  
○発題者：高瀬国雄氏（IDC J顧問、AJF理事、TCSF理事、SRID会員）  
○会場：国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室
3. シンポジウム  
○日時：2006年10月28日(土) 10:00 ~17:00  
○場所：JICA 国際協力総合研修所（市ヶ谷）  
○テーマ：「新たな開発協力のあり方：拡大する脆弱国家群への取り組み」
4. SRIDのドメインを取得しました。 ホームページは <http://www.srid.jp> にアクセスしてください。

## 二つの国際まちづくり

独立行政法人・都市再生機構岩手都市開発事務所長 小林 一

グローバル化の進むなか、モノの貿易だけでなく、ヒトや企業の交流もさかんになる。ヒトの交流については、短期は観光、長期は外国就労ということになるが、日本と外国との差し引きということになると、いずれも出超のようである。企業（投資）交流についても、日本企業の海外進出が外国企業に日本進出を上回っている。そこで、観光立国、外資系企業誘致が喧伝されるわけである。外国人就労については、もうひとつ慎重のようである。

そのなかで、ひとつのまちづくり戦略として、外国企業や外国人の受け入れを積極的に推進しようという試みがいくつか始められている。小生が少し関わっている例を二つほど紹介する。

### （アジア起業家村）

ひとつは、川崎市で推進されているアジア起業家 (<http://asia.or.jp/index.html>) である。読んでのとおり、アジアの起業家およびそれを目指す方々のコミュニティを創ろうという計画である。候補地は国際空港として再スタートする羽田空港の多摩川を隔てた川崎市側、現在、空港と直接アクセスを可能にする構想が進められている「神奈川口」である。羽田空港への近接性、京浜工業地帯臨海部、大田区や多摩川流域まで含む中小企業を含む幅広い産業集積、東京圏という最大の顧客集積といった立地条件は大変魅力的である。

川崎市としては、100年間近く日本の産業をリードしてきた臨海部の産業再生の一環という位置づけをもち、その一部をアジアの企業や人材の力を借りて成し遂げようというものである。すでに、中国、韓国、ベトナムからの起業家が10社近く、起業家村の初動期として、JFEが進めるテクノハブイノベーション川崎（THINK）のなかで営業を始めている。

少子高齢化時代を迎え、日本の新たな活力源としてアジアの力を借りるという考え方は重要だと思う。もちろん日本人もアジア人に含まれるし、志が一緒ならアジア以外の方も歓迎で、多国籍コミュニティの創出という意味でも、興味深い試みだと思う。

国際協力という視点では、ここでの新たな産業創出が母国やアジア諸国の産業発展にもつながっていくことが期待される。事実、起業家村に入居のベトナム企業の場合、ベトナムでも法人を立ち上げ現地でベトナム人のプログラマーを使って開発を行なっている。協働・ネットワーク型の国際分業が進んできていることも興味深い。

(歌舞伎町ルネッサンス)

もうひとつは、新宿歌舞伎町の再生プロジェクトとして推進されている歌舞伎町ルネッサンス

([http://www.kabukicho.or.jp/webdata/more/clean\\_day/20041229.htm](http://www.kabukicho.or.jp/webdata/more/clean_day/20041229.htm)) とそのなかで推進されている喜兵衛 (KIHEI) プロジェクトである。

歌舞伎町を安全で健全な町として再生させよう、それには、歌舞伎町の原点であるエンターテインメント産業を中核にしようということで、KIHEI とは Kabukichou – International – Hotspot – Entertainment – Industry の略である。喜兵衛とは、江戸時代に内藤新宿を開いた高松喜兵衛、第二次世界大戦後に歌舞伎町開発のリーダーだった鈴木喜兵衛という二人の喜兵衛にちなむもの、ウェブサイトの紹介によれば、歌舞伎町ルネッサンスを推進する協議会が目指すのは、鈴木喜兵衛氏が目指したのと同じ、「道義的繁華街の再生」である。実際は、家守という大家に代わってビルのテナントの募集や管理を行なうとともに町全体のプロモーションも行なおうという事業の一環として行なわれており、新たな町の担い手 (テナント) としてエンターテインメント産業からさらに広くコンテンツ産業、ソフト産業等まで、取り入れていこうというものである。第一歩としては風林会館にある昔のクラブの跡のフロアをエンタメ産業の拠点として開放・活用しようというプロジェクトが展開されている。

重要なのは、ここでも International – 国際的という言葉が使われていること、現実には多くの外国人が歌舞伎町や周辺には集まってきており、彼らのエネルギーを積極的に活用しようということだと思う。今年の7月27日には、風林会館のクラブフロアで「AF 人の会2006」というイベントも開催されている。AF とはアジアファッション、今やファッションもアジアの時代なのであり、先々歌舞伎町境界の通路などを使ったファッションショーも計画しているそうである。

アジア起業家村も喜兵衛プロジェクトも共通するのは、日本のなかにアジア人を中心に国際的な産業コミュニティを創出すること。その先々の展開を考えると壮大な企てであるが、小さな一歩がすでに踏み出されたことに注目したい。

## EBRD 新マケドニア・カンントリー・ストラテジー体験記

EBRDスコピエ事務所長 中澤 賢治

欧州復興開発銀行 (EBRD) は27カ国の支援対象国に対して二年に一度、国別の支援戦略ペーパーを策定し、過去二年間の当該国における銀行の活動状況と政治・経済情勢を振り返り、その活動を活性化させるためにどのような対応が必要なのかを関係各国、関連国際機関、NGO他の関係者と協議するための資料として活用している。今回、マケドニアに対する新ストラテジーが7月11日にEBRD理事会で承認され

た。

新ストラテジーはマケドニア政府が2005年12月にEU 加盟候補国の地位を獲得するに至った過程で、法制面で多くの改革努力がなされたとともに、財政の健全運営に向けて地道な努力をしてきたことを高く評価する。一方で、これらの改革が実際に施行され、沈滞する経済の活性化、36%を超える失業率の改善に寄与するのてなければならぬことを強調し、そのためにEBRDとしてどのような貢献がなしうるかという視点から、向こう2年間を見通した業務計画となっている。その骨子は以下の通りである。

- 中小企業（SME）をはじめとするビジネス環境の改善に向けて協力を継続する。
- 銀行部門の強化を通じて、中小企業金融の活性化を図る。
- 公的部門の民営化、商業化と地方分権化政策への支援を通じて、外国投資（FDI）の増加と、インフラの近代化を支援する。

新ストラテジーの目玉として、西バルカン地元企業支援の新ファシリテイ、マイクロおよび中小企業（MSME）支援の新クレジット・ライン・ファシリテイに加え、本年5月のEBRD年次総会の時に11か国が支援方針を表明した西バルカン・マルチ・ドナー基金の積極的活用などがある。これらは手法としては、EBRDにおける最貧地域である中央アジア、コーカサス7カ国を対象にパイロット・プログラムとして、スタートしたETC（移行途上国）ストラテジーのもとでテスト済みのものである。こうしたドナー国との協調を前提とする新アプローチがバルカン地域でも認められたことは、EBRD全体として、既にEU 加盟を果たすに至った移行先進地域の支援からもっと東の後進地域（バルカン、コーカサス、中央アジア、ロシアの周辺地域）に活動の中心を動かそうとする銀行全体の活動戦略を反映したものとなっている。

事務局としてのストラテジー準備作業は三段階に分類される。

- 要約版の作成とそのEBRD理事会承認（2006年2月—4月初め）
- 要約版の公示と関係各層からの意見聴取（4月—6月初め）
- 全体版の作成とEBRD理事会承認（5月—7月初め）

前職であるタシケント事務所時代は、ストラテジーの業務部分の作成と全体のチェックは担当したものの、取りまとめの総括は本部の中央アジア局が行っていたので、今回は初めての経験でいろいろ戸惑うことになった。チームが変われば、同じ仕事でもやり方が変わるの、国際機関の場合珍しくない。

具体的な草案作成にあたっては、スコピエ事務所長、EBRD政治顧問、マケドニア担当エコノミストの三人がチームとなり、さらに銀行局各部門（電力、運輸、自治体インフラ、金融、マイクロ・ビジネス、農業チーム他）のバンカー諸氏、環境スペシャリスト、プロジェクト評価担当、法務担当のそれぞれに対して専門の箇所に

ついて原稿を依頼し、締め切りを交渉し（皆さん他の通常業務で忙しい）、あがってきた原稿に問題がありそうな場合は理由を明示して改善を提案することになる。こうした草案作成プロセスを了えて、主管部局の局長、EBRDの業務委員会（Operations Committee）、さらに経営委員会（Executive Committee）の審査を経て理事会に二度（要約版と全体版）提出するには、約半年の調整と根回しを必要とした。この間他の業務もあるので決して楽ではない。今年の場合は年明け以降、国としての地位確定問題と大統領交代のあおりを受けて活発化したコソヴォ対応の業務が増えたことと、ちょうど三月に数年に一回くらいの理事会メンバーによるスコピエ訪問とが重なり、新ストラテジーの準備に十分な時間が取れないのではないかと心配した。結局、理事会ミッションの準備がそのまま新ストラテジーの草案作成に活かされ、予定通りに準備作業を進めることが出来た。

4月早々に要約版をEBRDウェブ・サイトに公示すると在スコピエの諸機関（IMF, EU, 世銀、EAR）や、各大使館から現状分析の部分について貴重な示唆とコメントを頂いた。またNGOとの接触を積極的に行ったところ、その会合に参加した地元の二つのシンク・タンクから多くの質問を受け取った。それらを24項目に分類し、Q&Aの形で、これも理事会承認を得て、EBRDウェブ・サイトに公示した。

6月27日にリハーサルとも言えるべき理事会ワークショップを経て、そのコメントを最終版に取り込み、7月11日の理事会発表を迎えた。理事会の審議はその直前の7月5日に行われたマケドニアの総選挙で政権交代が明らかになったことから、このように大きな政治情勢の変化がEBRDの業務にどのような影響を与えるのかについての議論にしばられた。事前の根回しでは、新ストラテジーの承認延期も必要かという見方も出ていた。仮に延期ということになれば、新政府がスタートするのは9月の半ばのことになるので、承認は年末になりかねない。実務方としては、ストラテジーの空白によって、新規プロジェクトの発掘・準備作業に無用の遅れを生ずる結果になりはしないかと危惧した。

追い風となったのは、総選挙に勝ったVMRO-DPMNE連合の選挙用の百頁におよぶ新政策マニフェストが、EBRD新ストラテジーの骨子と極めて良く合致しており、随所にEBRDを含めた国際金融機関との協調が掲げられていたことだった。理事会メンバーからの質問に対し、この点を具体例をあげて説明すると、満場一致で延期の必要はなく、新ストラテジーは承認との結論となった。EBRDの超ベテランの政治顧問であるクリスが政権交代に至った過程と今後のシナリオを雄弁に語ってくれたことも決め手となった。

新ストラテジーの全体については是非EBRDウェブ・サイトをご参照いただくか、もしくは小生あてにメールでご依頼下さい。

EBRDスコピエ事務所長 中澤 賢治

NakazawK@skp.ebrd.com

